

焼酎粕利用バイオガス発電

県内初の循環型クリーンエネルギー

廃液は堆肥化

県内で初めてとなる焼酎粕^{しょうちゅうばく}を利用した本格的なバイオガス発電所（出力600キロワット）が宇佐市に登場する。未来電力（同市、末宗秀雄社長）が7月稼働を目指し、同市日足のミカン園跡地に建設中だ。処分される焼酎粕を使うことでコストを削減するほか、耕作放棄地の有効活用や雇用創出に期待がかかる。発電後に残る「消化液」も肥料として活用が可能。循環型クリーンエネルギーとして注目される。

【大瀬実知朗】

7月に宇佐で稼働へ

発電所は、焼酎粕などを発酵させて取り出したメタンガスでタービンを回し発電させる仕組み。ガスを取り出した後に残る消化液は、液肥や固形肥料にして再利用する。

焼酎粕は焼酎製造過程で蒸留後に残る液体。焼酎メーカーはコストをかけて処分しており、未来電力はこれに目を付け、県内の焼酎メーカー数社から焼酎粕の供給を受ける手はずを整えた。

総事業費は約10億円。敷地面積約8000平方メートルには、ガスエンジン（発電機）やメタン発酵槽、ガスを貯留させるガスホルダーなどが並ぶ予定だ。焼

酎粕など有機性廃棄物を1日約30ト処理する能力があり、年間総発電量は約303万キロワット時となる見込み。九州電力（福岡市）に売電する方針で、年間1億2000万円の売り上げをめざす。

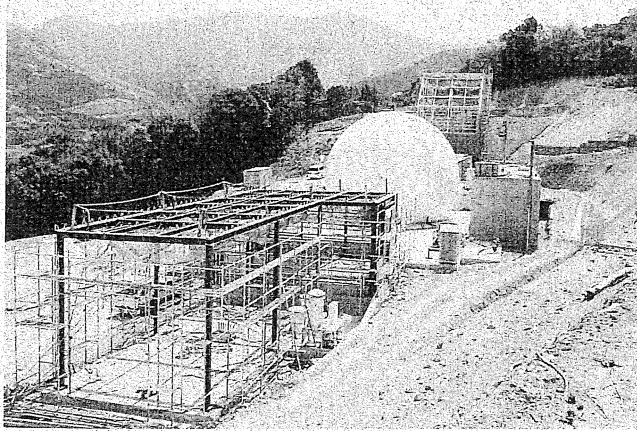
消化液は液肥として、ミカンなどを栽培する地元農家には無償提供し、それ以外の地区の農家には売却する。さらに、同電力の関連会社、未来農林（末宗秀平社長）が発電所の隣にカボス・ミカン農園（25畝）を運営。液肥の供給を受け、カボスジュースなどを生産することも計画中だ。将来的には、カボスやミカン狩りをできるよう

にするなど観光農園化を進める構想もある。

同電力は2012年に県内初のメガソーラー発電所を稼働させた。今回は焼酎粕を使ったバイオガス発電の

先がけになった。今回は日本プライスマネジメント（北九州市）からノウハウの提供を受けたという。末宗社長は「バイオガス発電の未来は明るいが、初めての試みなので楽観していない。農園と連携した新しい産業を目指したい」と意気込む。

発電所があるのは、宇佐神宮の奥宮・大元神社がある御許山の麓で、ミカン園や山林が広がる丘陵地帯にある。



宇佐市で建設中のバイオガス発電所